

法隆寺僧頭真と聖徳太子勝鬘経講讚像

桑野 梓

はじめに

奈良・法隆寺聖霊院に安置される聖徳太子坐像【図1】は、『法隆寺別当次第』等の記事から、保安二（一一二二）年の造立、開眼とされ、平安時代を代表する聖徳太子彫像としてよく知られた像である。頭頂にいわゆる冕冠を戴き、正面を見据え、袍を着して両手で笏を執る姿は、我が国の仏法興隆の基礎を築いた人物の肖像彫刻としてまことに相応しい姿である。現在、聖霊院内陣に造り付けられた厨子には、中の間に聖徳太子像が、東西の間には聖徳太子像と同時期に制作されたとみられる侍者像四軀が安置され、いずれも秘仏となっている。

『法隆寺大鏡』をはじめ、『奈良六大寺大観』や『日本彫刻史基礎資料集成』など、従来の先行研究や解説では、『聖徳太子伝私記』（以下、『私記』）の記述を引用し、聖霊院聖徳太子坐像（以下、「聖霊院像」）を太子四五歳の勝鬘経講讚像とし、侍者像をそ

れぞれ山背大兄王像、殖粟王像、卒末呂王像、恵慈法師像としてきた。しかしながら、近年、石川知彦氏^①や浅井和春氏^②、鷲塚泰光氏^③らによって、聖霊院像が勝鬘経講讚像ではなく、撰政像である

図版略

図1 聖徳太子坐像 奈良・法隆寺聖霊院

との見解が提示されている。絵画作品等で確認できる勝鬘經講讀像は、冕冠を戴き、袍の上に袈裟を着し、麈尾を執る姿であらわされているが、聖靈院像は冕冠を戴くものの、袍のみを着し、両手で笏を執り、通常の勝鬘經講讀像とは大いに異なっている。また、四侍者像は、それぞれ如意、筥、大刀、柄香炉を執っており、太子の勝鬘經講讀を聴聞する姿としては不審である。各氏が指摘されるように、聖靈院像の像容は、通常みる勝鬘經講讀像と摂政像がもつ要素が折衷された形で表され、聖靈院像がいかなる像であったのかについては、なお検討すべき余地を残していると思われる。

そこで本論では、聖靈院像に関する言説、特に頭真の言説を再検討し、流布する勝鬘經講讀像との比較検討を通じて、聖靈院像の歴史的な性格を明らかにしたい。

第一章 法隆寺聖靈院聖徳太子坐像

まず、聖靈院像の概要について確認しておきたい。聖靈院像に關しては、既に『日本彫刻史基礎資料集成』⁵⁾『奈良六大寺大観』⁶⁾に詳細なデータが公刊されており、ここではまず像容等、必要事項のみについて確認しておきたい。⁷⁾

像高は八四・二センチメートル。巾子冠頂上に冕板を載せたいわゆる冕冠を戴く。冕板上中央と四隅には、宝珠（蓮弁型台座付）をあらわし、四周から吹玉、瓔珞からなる垂飾を垂らす。巾子冠

正面上には毘沙門天立像（一木造・素地）を載せる。やや眉を寄せて口を僅かに開き、上歯をあらわし、窄袖の上に朱の袍を着し、石帯を結び、両手は肘を曲げて腹前正面で笏を執る。襪を履いて左足を外にして坐す。後補部は、冕板、毘沙門天立像、左袖口の一部、持物、裳先の一部、像底蓋板である。

聖靈院像の制作時期について述べる前に、聖靈院像を安置する聖靈院の創建過程について述べておく。貞治三（一三六四）年、重懷撰述の『法隆寺縁起白拍子』⁸⁾（以下、『白拍子』）によれば、かつて勸学院に「上宮太子卅五歳真影」を安置したが、その後、同院が荒廃したために太子像を天仁元（一一〇八）年に別当経尋が綱封蔵に移坐し、翌年綱封蔵の南に七間三面の坊宇を建てて聖靈院とした。この時、太子像と四軀の侍者像は修復され、太子像胎内に、蓬萊山に据えた古仏の金銅救世觀音像、細字書写の三経を納め、永久年中（一一三〇一七）に経源上人によって供養された。以後保安二（一一二二）年に再び経尋の発願により東室の南側の一部を改造して太子像と侍者像四軀を移し、ここを改めて聖靈院としたことが記されている。⁹⁾

『白拍子』の記述を信用すれば、聖靈院像の制作時期は少なくとも天仁元（一一〇八）年まで遡ることができるが、倉田文作氏が指摘するように、¹⁰⁾天仁の建立のあと、僅か一三年を経た時期に再興修復されたとする点は不審であり、今日では聖靈院像及び侍者像四軀は保安二年の聖靈院完成時に制作、開眼された像と考えら

れている。

聖霊院像は、頭部を小さめにつくり、上半身をやや長めにし、両肘と膝の張りを充分にもたせて、像全体を安定感のある造形に仕上げている。袖、膝前にみる衣文は、穏やかで整えられた表現だが、左右で微妙な違いをみせており、その表情とあいまって肖像彫刻としての森厳性をよく保っている。

このような造形は、治暦二（一〇六六）年奈良・靈山寺薬師如来坐像をはじめとする一一世紀後半から一二世紀前半の作品に共通して認められるが、聖霊院像は硬直な表現は消え、穏やかな表現に包まれている。また胸の張りを適度に抑えた造形や、やわらかな衣褶の表現は、大治五（一一三〇）年、院覚作とされる京都・法金剛院阿弥陀如来坐像や、保延五（一一三九）年同・安楽寿院阿弥陀如来坐像などのそれと共通し、衣はその厚みと質感を表しながらも、肉身に張り付くように表される。以上のことから、確かに聖霊院像は一二世紀前半から半ばまでの特徴をもつ作例であると考えられる。

第二章 聖霊院像と聖徳太子勝鬘経講讚像

『法隆寺大鏡』をはじめ、『奈良六大寺大観』や『日本彫刻史基礎資料集成』など、従来の先行研究や解説では、『私記』の記述を引用し、聖霊院像を太子四五歳の勝鬘経講讚像とし、侍者像をそれぞれ山背大兄王像、殖粟王像、卒末呂王像、恵慈法師像として

きた。しかし近年では、聖霊院像が勝鬘経講讚像ではなく、本来は摂政像であるとの見解が提示されている。『白拍子』のほか、近世の法隆寺史料でも聖霊院像を「三十五歳之御影」「三十五歳摂政之御影」「上宮法皇聖像」とし、『私記』以外には、聖霊院像を勝鬘経講讚像とみなす明確な記述は認められない。元禄一一（一六九八）年の『台覧記并諸堂佛鉢數量記』にも「中之聖徳太子自作三十五歳摂政之御影」とあり、やはり『白拍子』の記述が採用されている。このように聖霊院像については勝鬘経講讚像と摂政像との両説が史料に認められ、尊名の確定が難しいのが現状である。

よって、聖霊院像の尊名を再検討するために、聖霊院像を、現存するほかの聖徳太子勝鬘経講讚像、摂政像と比較してみたい。聖徳太子勝鬘経講讚像を描く、現存最古の作例は、東京国立博物館法隆寺献納宝物である秦致貞筆・聖徳太子絵伝である¹⁾。しかしながら、本図では聖徳太子の姿は描かれず、太子が講讚する建物の前面に、蓮華が降り積もる様子が描かれるのみである。

一方、聖徳太子の姿を描いた最古の作例とみられるのは、承久四（一二二二）年、南都絵仏師尊智筆という、法隆寺舍利殿安置の御影に比定されている、奈良・法隆寺聖徳太子勝鬘経講讚像【図2】である。本図の聖徳太子像は冕板を載せ、巾子冠上に毘沙門天立像が描かれているのが確認できる。また、着衣は袍の上に袈裟と横被をまとい、左手には塵尾を執り、右手は机上の経巻に添えている。また、ほぼ同じ頃の制作とされる兵庫・斑鳩寺聖徳太

図版略

図2 聖徳太子勝鬘經講讚像（伝尊智筆）
奈良・法隆寺

図版略

図4 聖徳太子勝鬘經講讚像
大阪・四天王寺

図版略

図3 聖徳太子勝鬘經講讚像
兵庫・斑鳩寺

子勝鬘經講讚像【図3】も、同様の姿で描かれている。また、大阪・四天王寺聖徳太子勝鬘經講讚像【図4】ほか、鎌倉時代の制作と考えられる聖徳太子勝鬘經講讚像をみてみれば、聖徳太子の左右の向きや冕板の形状など多少の相違はあるものの、基本的には同じ図様で描かれている。これらの絵画に描かれる一般的な聖徳太子勝鬘經講讚像と聖霊院像を比較してみると、冕板を載せ、中子冠上に毘沙門天立像を置く点、袍を着す点が共通する。しかし聖霊院像は袈裟と横被を纏わず、また笏を正面で右手を下、左手を上を執る点が、絵画作品の勝鬘經講讚像とは異なっている。

以上のことから、聖霊院像が勝鬘經講讚像であると認められるための指標となる要素は、冕板、毘沙門天立像であることが理解できる。しかしながら、先にも述べたように、聖霊院像の冕板、毘沙門天立像は後補であることが指摘されている。すなわち、聖霊院像の本来の姿には勝鬘經講讚像としての要素は認められず、

むしろ、摂政像のような姿であったと考えられるのである。

一方、大阪・四天王寺の聖徳太子摂政像（楊枝御影）や奈良・法隆寺聖徳太子摂政像（水鏡御影）と聖霊院像とを比較してみると、後補の冕板と毘沙門天立像を除けば、巾子冠を被る点、袍を着して両手で笏を執る点が共通すると言える。しかし、佩刀しない点や正面左右の垂らした帯をあらわさない点、足の組み方など相違する部分もあり、必ずしも摂政像であると言い切れないであろう。

第三章 『私記』と聖徳太子勝鬘経講讃像

第一節 『私記』と顕真

先述のように、聖霊院像が聖徳太子勝鬘経講讃像であると記すのは、『私記』であり、これによって聖霊院像は、太子四五歳の勝鬘経講讃像であるとされてきた。この『私記』を記したのは顕真という法隆寺僧である。

顕真は、聖徳太子の舎人であった調子丸二八代の孫と称した¹³、鎌倉時代中期の法隆寺僧である。生没年は不明ながら、経歴については荻野三七彦氏、藤田経世氏¹⁴による紹介があり、それによれば、嘉禄三（一二二七）年七月一日の条に講問番論義における六人の論匠の一人として名が挙げられているのを記録上の初見とする（『法隆寺別当次第』¹⁵）。その後、仁治三（一二四二）年一月九日、九条道家が参詣した際、諷誦の導師を務め、また寛元元

（一二四三）年、九条道家が再び参詣した際、年会代を務めた（『法隆寺雑記』）。さらに弘長元（一二六一）年、後嵯峨上皇が参詣した際には先達を務めるなどの活動が確認できる。造仏との関連を示せば、天福二（一二三四）年、中門金剛力士像修復の際に漆を勧進しており、嘉禎二（一二三六）年には「唐本御影」の表装替えの指揮にあたっている。また、建長六（一二五四）年には近衛兼経参詣の際に聖霊院を宿坊として提供し、その縁で兼経の助成のもとに「聖皇曼荼羅図」を制作、完成させている。正嘉二（一二五八）年九月には、聖霊院六臂如意輪観音像（唐時代）の修復を叡尊に依頼する（台座裏墨書）など、鎌倉期の法隆寺復興に尽力している。弘長二（一二六二）年六月条の置文に、塔基宝篋印陀羅尼衆の一人として名を連ね（『聆濤閣帖』）、これを最後の記録とする。

顕真が撰述した『私記』は折本二帖からなり、明治期の皇室献納を経て、現在は東京国立博物館に保管されている。紙表ならず紙背にも記事が書かれており、紙表に本文を執筆し、紙背にその補注をしたための体裁をとっている。身辺にある雑紙や反故紙を継ぎ足して料紙とし、また、添削や加筆も多く認められる。撰述時期は本文中の年紀から、上巻が嘉禎四（一二三八）年夏頃、下巻は翌年から寛元三（一二四五）年頃にかけての成立とみられる¹⁶。なお、加筆修正は建長七（一二五五）年頃まで行われたと指摘されている¹⁷。

『私記』が顕真によつて執筆された当時、法隆寺は、聖徳太子信仰の寺院としては、むしろ四天王寺の後塵を拝していた。よつて『私記』は、法隆寺の聖徳太子信仰の中心寺院としての地位を確立するといふ意図をもつて記されていることが指摘されている。また、『私記』が成立する直前、嘉祿三（一二二七）年には四天王寺において『太子伝古今目錄抄』が成立しており、形式や性格の類似性から、これに対抗する意識をもつていたことも指摘されている。さらには、顕真自身の法隆寺内での地位の向上といふねらいもあつたといふ。このような『私記』成立の事情を踏まえながら、『私記』を通じて顕真の太子勝鬘経講讀像の理解の様相を確認することにした。

第二節 『私記』にみえる聖徳太子勝鬘経講讀像

まずは、『私記』¹⁸から聖霊院像をはじめ、太子勝鬘経講讀にかかると記述を抄出し、次にそれぞれに検討を加えることにしたい。

（上巻）

- ①次麿尾二枝。一者日本様。挿白猪毛。今ハ消无之。一者ハ唐土ノ様。荃象ノ牙。枝銀。葉ハ象牙。瓔珞之玉。白者ハ真珠。アコヤノ青者ハ瑠璃也。 六生ノ持物。
- 今此ノ麿尾ヲ握テ有勝鬘経講讀之説云。即見二卷傳ヲ。若如此ノ傳者。太子請来ト與。勝鬘経講讀。前後相違セリ。昔此経ヲ給講シ。二度也。若如傳ノ文者。太子将来之後乃講讀之時キ。雨端花。佛頭出現シ給歟。其誤テ先度講讀之時有此儀式記スル歟。若初

度ノ講讀ニ有ト云端相説者日本ノ麿尾ヲ用并給ル歟。

②次健陀羅國衲袈裟。又以此袈裟ヲ勝鬘経講讀ト云々。此モ只如（瑞）唐麿尾。先生所持物。

③次舍利殿ニ有勝鬘経講讀之御影。其ノ曼陀羅者。蘇我大臣。小野臣妹子。大兄皇。五徳博士學呵。外典御師也。高麗ノ僧

惠慈。内典御師也。御前安全利（上）。木瓦葺。有階（下）。但シ大房ノ南三房ヲ新メテ為ス聖霊院ト。有妻庇。高麗ノ僧惠慈。内典御師也。御前安全利。木瓦葺。有階

隱。在高藍晏者。簀子敷也。此内ニ在ス太子ノ御影。玉ノ御冠ニ赤衣ヲ持。持下。三人ノ仕者。高麗ノ僧惠慈ハ衲袈裟ニ持

香呂。太郎王子ハ持如意。二郎王ハ持念珠莖。三郎王ハ御大刀ヲ持。乍三人鬢頬髪不垂。大兄王子着衲袈裟。自余二人者

保安二年壬午十一月廿七日奉移新聖霊院。又三昧同年。中略三人ノ皇子ト者。大兄山背王。殖栗王。卒末呂ノ王也。

太子御歳卅四勝鬘経講讀御影也。次度講経冊御時。此正説也。

此御影本正倉院北面北向御即本聖霊院也。保安二年壬午十一月廿二日奉移東室。

此太子奉勅者ニケ度也。乍二度共別當院主當灾。故更不可奉先師口傳。裏書

⑥太子ノ御身中ニ救世觀像居奉。御眼ヲ當太ノ御目。御心ニハ書法花・勝鬘・維摩ノ三経ヲ籠納タリ云。造此院ヲ保安二年辛丑

云々。太子ノ御身中ニ救世觀像居奉。御眼ヲ當太ノ御目。御心ニハ書法花・勝鬘・維摩ノ三経ヲ籠納タリ云。造此院ヲ保安二年辛丑

鳥羽院御時。

⑦舍利殿之或所^ニ太子御影曼陀羅^ニ有三義。一卅五御歳勝講^曼誦之時^ハ蓮花雨。令著本朝塵尾并給。二卅五御歳勝誦^曼不降蓮花。令著健陀^柄繪袖袈裟^ヲ。并令持先生所持塵尾給。卅世人混合兩度講誦御影^ヲ。先生所持柄塵尾^ニ高雨蓮花様^ヲ也。

⑧此^ノ經者講誦二度。作疏兩度也。此^ノ自講誦^ノ時間答決擇^ハ始レリ云々。前^{サキ}講誦^ハ卅卅乙丑歳。後^{チノ}講誦^ハ卅五丙子也。握塵尾^{トリシユヒ}服納^{ツキ}給^ヒ。雨^{フリ}花出^{下シカモ}佛頭^{此ノ}時^{ナリト云々}【裏書】

(下巻)

⑨橋京當時橋寺也昔講誦跡也。

又語云勝鬘經講誦自七月^始十五日^始三ヶ日。十八日朝^ニ花雨^其。朝前山千佛頭出給。或十六日^{ヨリ}始之。

⑩聖靈院御影者勝鬘經講誦御年然者兩度後度卅五可異云々。

【裏書】

⑪橋寺寶物

御歯^ハ佛御頭^{佛頭出現}三尺蓮花(以下略)【裏書】
(誤字・脱字と思われる箇所は、便宜上()に入れ、傍書した。)

抄出記事のうち、④・⑤・⑥は、聖靈院像についての記述であ

る。⑥は先にも触れた像内納入品についての記述である。④は聖靈院像と四侍者像の姿かたちを記述しており、「玉御冠赤衣^{折入金云々}持笏」の記述は、聖靈院像に関する記述である。ここでは、「太子御影」「太子御身」とされ、聖靈院像を勝鬘經講誦像としていない点に留意したい。

しかし⑤では「太子御歳卅四勝鬘經講誦御影也。」と、聖靈院像が勝鬘經講誦像であることを示している。続けて、「次度講誦卅卅御時。此正説也。此御影本正倉院北面北向御即本聖靈院也云々。」と記し、二度にわたる勝鬘經講誦における太子の年齢をそれぞれ三四歳と四五歳に確定し、「正説」としている。ただし、ここで勝鬘經講誦像とされた聖靈院像は、太子三五歳時の勝鬘經講誦像であるとされる。さらに、ここでは四四歳から四五歳と年齢に修正が加えられ、他にも、「勝鬘經講誦」〔①〕、「次度講誦卅卅御時」〔⑤〕、「前^{サキ}講誦^ハ卅卅乙丑歳。後^{チノ}講誦^ハ卅五丙子也。」〔⑧〕と、頭真は二度の勝鬘經講誦時の年齢を幾度も修正していることが確認でき、このことから、頭真が太子講誦時の年齢を確定しようとした意志を読み取ることができると同時に、当時、聖徳太子の二度の勝鬘經講誦時の年齢について諸説あったことがわかる。

太子勝鬘經講誦時の年齢は、『日本書紀』では、初度の勝鬘經講誦は推古一四(丙寅・六〇六)年秋七月に行なわれたとし、平安時代初期の成立とされる『上宮聖徳法王帝説』では、戊午年(推古六(五九八)年)四月一五日と伝え、さらに『上宮聖徳太子伝

補闕記』では丁丑年（推古一五（六〇七）年）四月八日のこととしており、いずれも後度の講讚については記されていない。平安中期頃の成立とみられる『伝暦』に至ってはじめて、推古一四年秋七月の太子三五歳時と、同二五年夏四月、太子四五歳時の二度にわたって講讚が行なわれたと記されるようになり、諸本によって講讚の回数、年齢の振幅は大きいと言わざるを得ない。こうした状況の中で、顕真が太子講讚時の年齢確定にこだわりを見せたのも自然なことと思われ、先の三四歳と四五歳を「正説」としたのも、顕真の見解を披露したものと思われる¹⁹。

ここで改めて『私記』の記事を見てみたい。①は法隆寺所蔵の唐製塵尾に関する記事であるが、後段には太子勝鬘經講讚との関係が説かれている。②にも、講讚時における「健陀羅國衲袈裟」と塵尾に関して記述している。このことから、顕真の関心は、講讚時の年齢確定のほかに、勝鬘經講讚に際しての太子の持物、服制、奇瑞に向けられていたと言える。換言すれば太子勝鬘經講讚図像における両度の相違について明らかにしようとしていたのではないかと考えられる。①と⑦に記される両度の勝鬘經講讚の相違について要約すると、三五歳講讚時には、太子は「本朝衲」（袍）を着し日本製塵尾を執り、講讚時には蓮華が降ったのに対して、四五歳時では、「健陀羅衲袈裟」（いわゆる袈裟）を着し、「先生（前世）所持」の塵尾、つまり中国製の塵尾を持ち、蓮華は降らなかったとするのである。

しかし同時に⑦の後段では、世人は両度の講讚を混同して、中国製塵尾を所持しながら、蓮華が降下する図が存在していたことを伝えている。⑦のはじめに触れられる、「舍利殿太子御影曼陀羅」、すなわち、承久四（一二二二）年、伝尊智筆の聖徳太子勝鬘經講讚像は、③においても触れられている。顕真が、両度の勝鬘經講讚について明らかにするとき、本図を参考にしていたことが理解されるが、本図に描かれる聖徳太子は、袍の上に袈裟と横被をまとい、左手には塵尾を執り、右手は机上の経巻に添えている。顕真は③において、伝尊智筆の聖徳太子勝鬘經講讚像は、袈裟を着す服制から、四五歳の太子勝鬘經講讚図に比定している。

つまり、顕真は太子勝鬘經講讚図における服制、塵尾、蓮華降下といった奇瑞の有無で識別を試みようとしたが、既に両者を混同して描いた絵画作品が流布していたことを指摘している。顕真の記述よれば、本来は袈裟の有無、塵尾の相違、奇瑞の有無で峻別できるとした。塵尾については既に、星山晋也氏の詳細な検討があるが、現存作例の上からは、塵尾の違いで判別することは困難である²⁰。

また、袈裟の有無についても今日、彫刻作品にあつては、時代は降るものの、永正一二（一五一五）年舜慶作、奈良・橘寺像や兵庫・中山寺像なども、勝鬘經講讚像は袍に袈裟を着け、手に塵尾を執る形式で表されている。絵画作品における勝鬘經講讚図、聖徳太子絵伝中の勝鬘經講讚の場面においても、太子は袍の上に

袈裟を着け、手に塵尾を執る姿で表されている。多くの勝鬘經講讃像と異なり、袈裟を着さない聖靈院像は、「本朝衲」である「袍」を着す太子三四歳時講讃像とみなした可能性は高い。この点は、⑩の聖靈院御影を四五歳像とすることに疑義を呈した記述からも補強される。²¹⁾ 顕真の聖靈院像の年齢についての見解はその後も概ね支持され、『白拍子』では聖靈院像を「卅五歳之御影」として²²⁾いる。

以上をまとめると、聖徳太子の勝鬘經講讃時の年齢については、法隆寺関係記録の中でも諸説あつて一定の結論は見出せなかつた。顕真はそれを三四歳と四五歳とし、これを一応「正説」とした。そしてその根拠を凶像の相違に求めようとし、袈裟の有無、塵尾の相違、奇瑞の有無で峻別しようとした。しかし顕真の頃、既に両凶像は混同されて峻別はできない状況であつた。これらの確定できない状況をふまえつつも、聖靈院像を勝鬘經講讃像として位置づけ、袈裟を着していない聖靈院像は、三四歳時勝鬘經講讃像であると位置付けたのである。

ここで再度『私記』の記述をみていく。①、⑦、⑨、⑪では勝鬘經講讃時の奇瑞について記している。⑦では太子三十五歳の勝鬘經講讃時に蓮華が雨のごとく降下したとし、①、⑧、⑨では蓮華降下に加えて「仏頭」出現を記している。⑨で太子の勝鬘經講讃の地であると伝えられる橘寺には、⑪で講讃時の奇瑞であらわれた蓮華と出現した仏頭を所持していると記され、太子の勝鬘經

講讃に関わる遺品が存在したことを窺わせる。①では、もしも「伝文」に従うならば、蓮華降下や仏頭出現という奇瑞が、「妹子将来之後講讃之時」に現出するのは不審であるとしている。ここに示す「伝」とは、「二巻伝」すなわち『伝暦』を示す。講讃時の奇瑞を記した初見は管見の及んだもので『伝暦』を挙げることでできる。秋七月、初度の講讃の時に「講竟之夜。蓮花零。花長二三尺。而溢方三四丈之地。」と記されている。また秦致貞筆による法隆寺旧絵殿安置の聖徳太子絵伝においても、太子勝鬘經講讃の場面にあつて色紙形に「太子講勝鬘經三日而講了夜零大蓮華」とあり、蓮華降下が初度の勝鬘經講讃の場面に重要なモチーフであつたことが確認できる。しかし「仏頭出現」については『伝暦』では確認できなかった。別本「太子伝古今目録抄」も同様で「蓮花長二三尺。三四丈之地。」と蓮華降下に触れるのみである。ところが『私記』において初めて蓮華降下とともに、⑨にみるように「千仏出現」の奇瑞についての記述が登場し、この奇瑞が勝鬘經講讃の場面で重要なモチーフとして描かれるようになる。

太子絵伝中の講讃の場面では、講讃する建物の周辺に描かれた山の稜線上に、光背を伴う如来像上半身あるいは頭部を多数描いている作例が現存する。制作年代のわかる作例としては、上野法橋但馬房筆、嘉元三（一三〇五）年制作の法隆寺伝来、東京国立博物館蔵聖徳太子絵伝中の太子三五歳勝鬘經講讃の場面である【図5】。そのほか、元亨元（一三二一）年茨城・上宮寺、同三年、

なくとも一三世紀から一四世紀には、「蓮華降下」という奇瑞に、「仏頭出現」「千仏出現」という新たな奇瑞が加わったと考えられるのである。

仏頭出現あるいは千仏出現の奇瑞は、聖徳太子勝鬘経講讚に関わるものであるが、聖霊院像には直接関わらない。よって本論では、仏頭出現あるいは千仏出現という奇瑞が、顕真によってはじめて紹介されたことを指摘するのみにとどめておく。

第四章 聖霊院像と太子信仰

以上の検討によって、顕真が『私記』において聖霊院像を三四歳時勝鬘経講讚像と位置づけたことが理解できた。しかしながら、その後近世に至るまで、聖霊院像は三四歳、あるいは三五歳の聖徳太子像として認識されていたものの、勝鬘経講讚像としては認識されていない。このことはかえって、聖霊院像が顕真によって勝鬘経講讚像として位置づけられたことを裏づけている。そうすると、顕真がなぜ聖霊院像を勝鬘経講讚像とする必要があったのか、また年齢が確定された聖霊院像がその当時どのような姿だったのかが問題となってくる。すなわち現在、聖霊院像が勝鬘経講讚像として認められる指標となるのは、冕板と毘沙門天立像である。にもかかわらず、顕真は『私記』においてそのことに全く触れていないのはなぜであろうか。

現在の中子冠上の毘沙門天像は『法隆寺大鏡』によれば、その

図版略

図5 聖徳太子絵伝〔部分〕(上野法橋但馬房筆)
東京国立博物館 Image: TNM Image Archives

遠江法橋筆、大阪・四天王寺などの聖徳太子絵伝中にも、山の稜線からあらわれる「千仏湧出」の奇瑞が描かれている。つまり少

痕跡のみが認められると述べられ、明治三八（一九〇五）年の修理時に付加されたものであることがわかる。また、弘化二（一八四五）年、清水定運による聖霊院像の模刻像をみると、巾子冠上には毘沙門天像があらわされておらず、すでにこの時期には巾子冠上の毘沙門天像は亡失していたと考えられる²³。

しかし、文安四〜五（一四四七〜四八）年に撰された『太子伝玉林抄』では、「問、三十五歳御影、冠上忿怒尊安之、為何尊。答往古相承多門天也云々。此即本師弥陀、相具福德、智恵、降魔之三徳、所現之身故、今為顯此徳載此天也。」とあって、聖霊院像の巾子冠上の毘沙門天立像について触れている。また、太子の本師が阿弥陀であり、「福德、智恵、降魔」の三徳が忿怒尊としてあらわれたものであるとしている。また『古今一陽集』²⁴では、「顕真得業云」として、以下のように記されている。

守屋御対治之時四天王之像造^テ與^レ諸將^ニ、令^レ安頂髮^ニ太子^モ則多聞天^ノ像安^ニ頂髮^ニ給^フ也、今卅五歳之御影像此也、文探事實^一。

つまり顕真の説として、巾子冠上の毘沙門天像は、物部守屋討伐の際に頂髪に隠し入れた毘沙門天像であるとした上で、良訓は事実を探るべしとしている。

聖霊院像の巾子冠上の毘沙門天立像の存在が確認できる最古の作例としては、法隆寺蔵「聖皇曼荼羅図」【図6】が挙げられる。「聖皇曼荼羅図」は、建長六（一二五四）年に堯尊によって描かれ

図版略

たのであるが、この曼荼羅を考案したのが顕真である。画面中央に間人母后を描き、向かって左に膳皇后、向かって右に聖徳太子が描かれる²⁵。これはいわゆる「三骨一廟の阿弥陀三尊」に擬されており、相次いで亡くなった三人が、同じ廟墓内に合葬され、間人母后を阿弥陀如来、膳皇后を勢至菩薩、聖徳太子を観音菩薩のうまれかわりとみなすものである。さらに下辺には、十七条憲法や三経義疏を描き、第二院と最外院には、聖徳太子前世の勝鬘夫人や、転生とされる聖武天皇、空海、聖宝らと、顕真が先祖と自称した調子丸、黒駒などが配されている。

ここで描かれる聖徳太子をみると、袍を着し、両手で笏を

図6 聖皇曼荼羅図〔部分〕 奈良・法隆寺

執る姿で描かれ、また冕冠を被り、毘沙門天像が巾子冠上正面に付いている。つまり、ここに描かれている聖徳太子は、まさに現在みる聖霊院像と同じ姿であることが理解される。

藤井由紀子氏は「聖皇曼荼羅図」を、「太子を観音の垂迹とみなしていた平安時代の太子観を基盤にして、浄土信仰の盛行に影響されつつ中世にいたってはじめて成し遂げられた展開」であると述べられる²⁶⁾。また、顕真は『私記』において、自身を葬送従事者としての調子丸の子孫と位置づけ、法隆寺を葬送儀礼、廟墓信仰の霊場として方向づけていくきっかけをつくっていったとされ、顕真が創出した調子丸のイメージによって、律僧が法隆寺と結びつき、大きな役割を果たしたことが指摘されている²⁷⁾。このような新たな太子信仰が創出されていく過程で、顕真は積極的に聖徳太子勝鬘経講讀に関する情報を収集し、太子勝鬘経講讀時の服制、年齢、奇瑞などについて具体的な検証を行い、聖霊院像を勝鬘経講讀像として位置づけた²⁸⁾。それをさらに「聖皇曼荼羅図」において、「三骨一廟の阿弥陀三尊」における聖徳太子として位置づけ、聖霊院像を中心として、太子勝鬘経講讀像と、廟墓を媒介とする太子信仰を結びつけた、新たな太子信仰を生み出したのである。

このような新たな太子信仰を生み出す起因となったのは、法隆寺が、四天王寺に聖徳太子信仰の中心地としての地位を奪われていたことと大きく関わってくるであろう。聖霊院像を太子勝鬘経講讀像と位置づけた理由、すなわち、数ある太子の事績のうち、

勝鬘経講讀を選択した理由は、法隆寺聖霊院像より早い、一一世紀前半に造立されたとみられる、四天王寺聖霊院の二軀の太子像（「聖霊像」と「童像」）との差異化が意図されたものと考えられる²⁹⁾。そもそも法隆寺聖霊院像は、その造立にあたって、四天王寺聖霊院の二軀の太子像と差異化が図られていたと藤岡穰氏は指摘される³⁰⁾。顕真は、特定の年齢、エピソードをもたなかった聖霊院像を、既に絵画作例で成立していた太子勝鬘経講讀像に重ね合わせ、聖霊院像のイメージを固めることで、四天王寺像とさらなる差異化を図ったと考えられる。さらに、聖霊院像は口をわずかに開け、経を講じる姿としてふさわしく、先にも触れた像内納入品においても、三経が納入されている³¹⁾。また、同時代に活躍した法隆寺僧慶政は、天福二（一二三四）年上宮王院、文暦二（一二三五）年三経院で、それぞれ絵画の聖徳太子勝鬘経講讀像の、安置供養の願主を務めたことが記される³²⁾。また、勝鬘会堅義が建保二（一二二四）年に始まり、さらに勝鬘経の版木が文永三（一二二六）年に制作されるなど、聖徳太子勝鬘経講讀に関わる制作や行事などが積極的に行なわれた。このような中で、聖霊院像を勝鬘経講讀像と位置づけるのは必然的であったと言える。

以上をまとめると、聖霊院像は顕真考案の「聖皇曼荼羅図」によって、廟墓を介した太子信仰と結び付けられることで、太子の「死」という、人間としての太子に関わる信仰と結びつけられた。このことは、四天王寺「童像」に付与された「生身の太子」とし

ての性格が、以降の太子像に通底するところとなったとされる藤岡氏の指摘にも当てはまる。また、聖霊院像を勝鬘經講讃像とすることに²⁴⁾よって、『伝暦』などの太子説話と聖霊院像を結びつけ、また、勝鬘經を講讃するという事績において、太子と仏法の結びつきを強調し、学問寺としての法隆寺を強く印象づけた。さらには、救世観音の垂迹であることを示すため、像内納入品の存在に加え、勝鬘經講讃像の巾子冠上の毘沙門天立像がその役割を果たしたと考えることができる。すなわち、毘沙門天が観音の応化身であるとする『法華經』普門品に説かれる観音の三十三応現の經説からすれば、毘沙門天像は、聖徳太子が観音のうまれかわりであることの指標として理解できる。

その姿からは摂政像ともみえる聖霊院像は、本来は特に年齢や事績と結びつかない御影像であった。しかし冕板と巾子冠上の毘沙門天立像によって勝鬘經講讃像として認識できるのであり、憶測すれば、以上述べたような、新たな太子信仰を生み出す過程で、顕真が、『私記』で全く触れない冕板と巾子冠上の毘沙門天立像を、聖霊院像に付け加えたという可能性はないだろうか。ただ、毘沙門天と勝鬘經講讃が結びついた直接の根拠は不明であり、この点に関しては後考に俟ちたい。

おわりに

以上、顕真撰述の『私記』を中心に、聖霊院聖徳太子像について

述べてきた。『法隆寺大鏡』以降、従来の研究では、『私記』の記述をもとに聖霊院像を四五歳勝鬘經講讃像、あるいは摂政像としてきた。しかしながら『私記』を仔細に考察する中で、顕真は二度の勝鬘經講讃時の年齢確定を試みようとした形跡が認められた。また、両者の違いを袈裟の有無、麈尾の相違、奇瑞の有無で峻別しようとしたが、当時、既に成立していた勝鬘經講讃像では、その特徴が混同されて描かれており、峻別は不可能な状況にあった。そのような中で、顕真はこれまで特に聖徳太子の事績と結びついていなかったと考えられる聖霊院像を、袈裟を着さない服制から、三四歳勝鬘經講讃像と位置付けた。それは具体的な太子の事績と結び付けることで人間としての太子の存在感を強くする意図があつたと考えられる。また、三四歳勝鬘經講讃像として位置づけられた聖霊院像は、「聖皇曼荼羅圖」に描かれることで、観音の垂迹であることを主張し、廟墓信仰に関連する生身性を付与され、新たな太子信仰の中心的尊像としての性格を担うことになった。その反映として聖霊院像は、勝鬘經講讃像とも、摂政像ともみえる姿となって、今日までその信仰を保ち続けているのである。

注

(1) 石川知彦「太子画像の諸相―説話画と礼拝画の接点―」『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』図録、同実行委員会、平成四(一九九二)年一〇月。

- (2) 浅井和春「聖徳太子及び侍者像〔法隆寺聖霊院〕」解説の項、「聖徳太子事典」石田尚豊編、柏書房、平成九（一九九七）年一月。
- (3) 鷲塚泰光「法隆寺聖霊院の聖徳太子及び侍者像」『聖徳太子展』図録、NHK・NHKプロモーション、平成二三（二〇〇一）年一〇月。
- (4) 太子勝鬘経講讃像の絵画において、描かれる聴聞者は、笏を執り威儀を正した姿で描かれるのが通有である。
- (5) 水野敬三郎「一〇一聖徳太子及び侍者像」『日本彫刻史基礎資料集成平安時代 造像銘記編』八、中央公論美術出版、昭和四六（一九七二）年二月。
- (6) 倉田文作「聖徳太子及び侍者像」『奈良六大寺大観』第四卷法隆寺四、岩波書店、昭和四六（一九七二）年五月。
- (7) 前掲註五によると、品質構造は、ヒノキ材の一木割刳造で、頭鉢幹部を一材から彫り、巾子冠を含めて両耳前で前後に割り刳ぎ、内割りの上、袍の襟内で割首とする。左右体側部、両脚部、裳先部、両袖部、両手首（別材質）を各々刳ぎ寄せる。腫部分には黒塗りガラス円板を嵌入している。像底に板を貼る。臉の縁には植毛とみられる細孔が連続して穿たれている。冠は黒漆塗りとし、髪、髭を墨描する。肉身は肉色彩とし、袍は朱地に截金で花文入二重方郭形文と網目丸文が、窄袖には同じく截金による花菱入七宝文が表わされる。袍裏は緑青彩とし、石帯は黒塗り、巡方は白土地に鬼形を金泥描きとする。
- 胎内には木製蓬萊山に据えた金銅製観音立像（奈良時代）と法華經二卷（執筆僧不詳）、維摩、勝鬘經一卷（執筆僧隆暹）の計三巻を漆塗り容器に収めて奉籠されている。納入品は、明治三八（一九〇五）年の修理時に確認され、昭和六〇（一九八五）年のX線撮影にあっても再確認されている。松浦正昭「調査報告一 聖霊院太子御影像についての新知見」『伊弉留我 法隆寺昭和資財帳調査概報』四、法隆寺昭和資財帳編纂所、昭和六〇（一九八五）年六月。
- (8) 以下、該当箇所を記す。

- 凡吾寺聖霊院者上宮太子卅五歳真影。尊崇安置霊室也。彼影像申スハ太子自御姿移シ給ヒテ勸学院ニ安置シ給ヒキ。涼煖年積シカハ。彼浄室荒廢之地トナリシ時。寺庫傍移入給ケルトカヤ。凡吾寺宝蔵其員卅三ヶ所也。（中略）西二字残卅一庫蔵ハイツレモ跡ナクナリニケリ。依之真影ヲハ綱封蔵ニソサレケル。于時鳥羽院御宇。天仁元年。当寺吏務別当伊房卿子息。経尋法印是也。同二年暮春比。諸堂参拜之時。見寺院之陵運給ヒテ。発再興修造之念願給ヒキ。都那師智経ト云候人。（中略）别当感給。真影安置之营造智経仰付ラレキ。依之則綱封蔵南。古庫蔵之礎石立七間三面之坊宇且承仕之住所定メラル。古太子御影并四人侍者影像修復給ヒシ時。古仏金銅救世観音一搦手半尊像アリ。新葺給ヒテ。作蓬萊山。居其上給フ。召当寺住侶増寛入寺懇預沙汰アリシカハ。門第五師覚印才芸アリシ人ナレハ。以仏面配影像眉間奉居。于胎中小字書写三經入漆篋。其上裏錦袋。副並仏像心間納メケリ。増寛入寺新造坊舎預シカハ。仮御宿所トシテ真影移入給シカハ。時人名聖霊院トソ号シケル。永久年中□経源上人調舞楽遂供養給ヒケリ。其後吏務別当重誓願シ給シハ。東面連室。古構僅残シテ。今悉及傾倒。僧侶止住儀久絶ニケリ。末代之執務難加修理トテ。保安二年取向大功給ヒテ。無程修造シ給ヒケリ。南三ヶ室根本御願タリシカハ。成精舎。移入真影給シカハ。本名引移号聖霊院ケル。四人眷属脇土トス。高麗惠慈法師衲袈裟香呂持。三人皇子御坐。大兄皇子持如意。第二皇子持念珠筥。第三皇子御劍持給ヘリ。院主五師覚印三經既胎中安置セリ。御製章疏アルヘキトテ。自筆書写三經疏。当室ニソ納ケル。
- (9) 現在の聖霊院は弘安七（一二八四）年に前方正面を五間に広げ、「聖霊院」として新築されたものである。
- (10) 前掲註六参照。
- (11) なお、聖徳太子勝鬘経講讃図の初現と展開については、以下の文献

に詳しい。

矢島新「聖徳太子勝鬘經講讀図」『国華』一一七三、平成五（一九九三）年八月。

(12) 聖徳太子絵伝を除いた鎌倉時代の制作と考えられる作例は以下のとおりである。

一三世紀 奈良・法隆寺 聖徳太子勝鬘經講讀像
一三世紀 東京国立博物館 勝鬘經見返し（勝鬘經講讀像）
一三～一四世紀 大阪・四天王寺 聖徳太子勝鬘經講讀像

一四世紀 京都・個人蔵 聖徳太子勝鬘經講讀像
一四世紀 大阪・藤田美術館 聖徳太子勝鬘經講讀像
一四世紀 京都・海住山寺 宝珠台

一四世紀 和歌山・福琳寺 聖徳太子勝鬘經講讀像
一四世紀 福島・光照寺 光明本尊（勝鬘經講讀像）
一四世紀 大阪・一心寺 聖徳太子勝鬘經講讀像

(13) 六臂如意輪觀音像銘文中に、「顕真大法師調子丸廿八代孫」とあり、さらには、『私記』中にも、「法隆寺康仁寺主者當寺奴也僕也。自調子丸至于康仁大徳廿二代也。其後不絶書傳、至于顕真五師八代也。」とある。好寺主始作血脉云々。其後不絶書傳、至于顕真五師八代也。」とある。
(14) 荻野三七彦「聖徳太子伝古今目録抄の基礎的研究」森江書店、昭和一二（一九三七）年二月。（同、名著出版、昭和五五（一九八〇）年一月。（縮刷覆刻版））

藤田経世『校刊美術史料 寺院篇』中巻、中央公論美術出版、昭和五〇（一九七五）年三月。

(15) 以下、顕真の事績において特に記載のないものは、『法隆寺別当次第』に拠る。

(16) 上下巻の一貫性のなさに関する指摘は以下に詳しい。
林幹彌「太子信仰の研究」吉川弘文館、昭和五五（一九八〇）年二月。

(17) 前掲註一四参照。

(18) 荻野三七彦校訂『聖徳太子伝古今目録抄』森江書店、昭和一二（一九三七）年二月。（同、名著出版、昭和五五（一九八〇）年一月。）

九三七）年二月。（同、名著出版、昭和五五（一九八〇）年一月。（縮刷覆刻版））

(19) 保安二（一一二二）年一月二日に東室に移し、その後二度にわたって動座があったことを伝え、その際に別当、院主が共に災難にあったため、以後は動座しない旨の口伝が記されている。二度の動座と別当、院主の死去については『法隆寺別当次第』の建久六（一一九五）年と嘉禄元（一二二五）年の条に、その記事を確認することができる。

(20) 星山晋也「聖徳太子勝鬘經講讀図の麁尾と麁尾を執らない講讀像」『論叢仏教美術史』吉川弘文館、昭和六一（一九八六）年六月。

(21) 荻野氏は「異」とし（前掲註一八参照）、『聖徳太子御傳叢書』所収の同本では、「真」としており、現状では判別はつきにくい。

(22) 法隆寺蔵「江戸出開帳日記」においても「聖徳皇太子御三拾五歳尊像」とあり、顕真の見解がその後も受け継がれてきたことが理解できる。

『特別展 法隆寺献納宝物』図録、東京国立博物館、平成八（一九九六）年一月。

(23) 同模刻像は近年展覧会に出品され、名称を撰政像としている。

『聖徳太子と国宝法隆寺展』図録、愛媛県美術館・愛媛新聞社・兵庫県立歴史博物館・神戸新聞社、平成一七（二〇〇五）年八月。

(24) 「中御殿上宮法皇靈像 壹軀」の項

(25) 荻野三七彦「法隆寺の聖皇曼荼羅」『美術研究』五九、昭和一一（一九三六）年一月。

(26) 藤井由紀子「中世法隆寺と聖徳太子関連伝承の再生―法隆寺僧顕真と調子丸、法華山寺慶政と太子御影―」『日本古代中世の政治と文化』吉川弘文館、平成九（一九九七）年二月。

(27) 顕真の『私記』における自身の来歴の造作については、前掲註一六
林氏、前掲註二六藤井氏ほか、以下の文献に詳しい。

武田佐知子「信仰の王権聖徳太子」中央公論社、平成五（一九九三）年一二月。

榊原小葉子「古代中世の対外意識と聖徳太子信仰―法隆寺僧顕真の言説の期するもの―」『日本歴史』六一七、平成一一（一九九九）年一月。

- (28) 京都・海住山寺宝珠台には、一面には石清水八幡宮の社殿と参道、もう一面には太子勝鬘經講讀図が描かれており、本二図は真言律僧叡尊を介して関連づけられることが指摘されている。ここで太子勝鬘經講讀図が採用されていることは、顕真の新たな太子信仰と叡尊の関係性を示すと考えられる。

- (29) 各像の年齢については近世にそれぞれ十六歳、四十九歳（五十歳）とされている。

- (30) 藤岡穰「聖徳太子像の成立―四天王寺聖霊院像を基点とする太子像の史的理解のために―」『文学』一一・一、岩波書店、平成二二（二〇一〇）年一月。また、聖霊院像に従う四侍者像について、如意を執る山背大兄王、笏を持つ殖粟王が、祖形と目された童子形三尊像の二童子の姿と共通し、大刀を執る卒末呂王は四天王寺「聖霊像」の、柄香炉を執る恵慈法師は「童像」の標識をそれぞれ採用した、とされた上で、四侍者像は、四天王寺聖霊院像二軀と、勝鬘經講讀像の諸要素を再構成したものと理解されるとした。

- (31) 口をわずかに開くのは、四侍者像も同様であり、神像としての性格を持ち合わせていた可能性も指摘されている。

- (32) 太子像の胎内に三経を納入する例は、弘安九（二二八六）年大阪・道明寺聖徳太子孝養像や、延慶二（一一三〇九）年奈良・円成寺南無仏太子像にもみられる。よって三経納入が勝鬘經講讀像に限られたものではないことを指摘しておく。

- (33) 『法隆寺別当次第』の覚遍別当代に記載。

- (34) 鈴木喜博「毘沙門信仰の一形態について―不動・毘沙門研究序説―」『仏教芸術』一四九、昭和五八（一九八三）年七月。

図版掲載に際して法隆寺をはじめ、各所蔵者の方々に写真掲載のご

許可を賜りました。また、本稿作成にあたっては、大阪大学大学院文学研究科藤岡穰教授にご指導を賜り、貴重なご意見をいただきました。ここに記して深謝申し上げます。

A Horyu-ji Monk, Kenshin, and *Shotoku Taishi Shomangyo Kosan Zo*

KUWANO Azusa

This paper examines the seated statue of Shotoku Taishi, enshrined in Shoryoin-in at Horyu-ji, Nara. Supposedly built at the beginning of the 12th century, it is a famous statue of Shotoku Taishi in the Heian period. The statue is a combination of what are known as *shomangyo* (*Śrīmālādevī Sūtra*) *kosan-zo* (seated statue) and *sessho-zo* (standing statue), looking straight ahead with a crown on his head, a hakama on his body, and rods in his hands. It is a bit enigmatic as to what this statue was really about. “*Shotoku Taishi den shiki* (Personal account of the life of Shotoku Taishi),” written by Kenshin, a monk at Horyu-ji in the Kamakura period, is worth noting to better understand this statue. Kenshin proclaims himself to be the twenty-eighth generation descendent of Choshimaru, a servant of Shotoku Taishi, and is among those who contributed to the restoration of Horyu-ji. This paper reveals the historic meaning of the statue by closely examining Kenshin’s references to the statue in his “*Shotoku Taishi den shiki*” and by comparing this statue with *Shotoku-Taishi shomangyo kosan-zo* that are seen in other places.